

第 56 回読書会「小説を読む／語る 2010」にむけて

——なんのために小説の読みかた／語りかたをふりかえるのか——

● 前田壘『小説の設計図^{メカニクス}』「第 2 章導入」より

小説の読みかたは、むろんさまざまである。自分と主人公、あるいは脇役の置かれた状況や立場、心情を重ねて読むしかたもあれば（ある種の恋愛小説や英雄物語など、そうでもしなければ馬鹿らしくて読めまい）、先の展開を予測して楽しむことも（推理小説に顕著である）、あるいはその作品が書かれた背景やそのときの作者の生活に思いを馳せることもできる。その意味で、小説を読むことは、小説を書くことと同じくらいに「自由」である。

だが、それらどんな読みかたにせよ、小説を読む私（たち）がしばしば見失いがちな事柄がひとつ、ある。それは、いまその小説（言葉）を、私（たち）が読んでいるのだ、というきわめて単純な事実である。言いかえれば、私（たち）でない者が読むならば、その小説はまったく違った姿を見せるということ、私（たち）が「その小説そのものだ」と思っているものは、原理的に、その小説の虚像ないし一部でしかない。それは、若者が、恋人が自分の前でだけは素顔を見せていると思込むことに似ている。

いったいなんの根拠があって、彼（彼女）はそのように信じることができるのだろうか？

● デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』「訳者あとがき」（柴田元幸）より

そんなわけで、小説を読む上で絶対のルールなどありはしないのだが、その一方で、ワープロソフトなどでいくつかのショートカットコマンドを知っていると作業の能率がぐっと上がるのと同じように、小説の作者・読者のあいだで従来ある程度の共通理解事項となってきた技法上の概念や手段を知っておいて損はないことも、また確かだと思う。もちろん、そういう概念や手段ばかりに目が行くようになってしまえば「損」でしかないが、一般には、健全な技術的知識は、同じテキストから読み取れる情報量を増やしてくれるはずである。要するに、小説をよりおもしろく読めるようにしてくれる。

【 この本の目次 】

1. 書き出し	14. 人物紹介	27. 複数の声で語る	40. 動機づけ
2. 作者の介入	15. 驚き	28. 過去の感覚	41. 持続感
3. サスペンス	16. 時間の移動	29. 未来を想像する	42. 言外の意味
4. ティーンエイジ・スペース	17. テキストの中の読者	30. 象徴性	43. 題名
5. 書簡体小説	18. 天気	31. 寓話	44. 思想
6. 視点	19. 反復	32. エピファニー	45. ノフィクション小説
7. ミステリー	20. 凝った文章	33. 偶然	46. メタフィクション
8. 名前	21. 間テキスト性	34. 信用できない語り手	47. 怪奇
9. 意識の流れ	22. 実験小説	35. 異国性	48. 物語構造
10. 内的独白	23. コミック・ノベル	36. 章分け・その他	49. アポリア
11. 異化	24. マジック・リアリズム	37. 電話	50. 結末
12. 場の感覚	25. 表層にとどまる	38. シュルレアリスム	
13. リスト	26. 描写と語り	39. アイロニー	

● トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』「プロローグ」より

素人読者は小説のテキストに向き合うとき、当然ながらストーリーと登場人物に着目する。これはどういう人間だろう。何をしていた、どんな幸運または不幸がふりかかろうとしているのだろうか。こうした読者は最初のうち、あるいは最後まで、感情のレベルでしか作品に反応しようとしな。作品に喜びや反発を感じ、笑ったり泣いたり、不安になったり高揚したりする。つまり、感情と直感で作品世界に没入するのだ。これこそまさに、ペンを握った、あるいはキーボードを叩いたことのある作家が祈りの言葉を唱えつつ作品を出版社に送るときに念じている読者の反応である。ところが英文学教授が小説を読むときは、感情レベルの反応も受け入れはするものの〔……〕、主たる関心は小説のほかの要素に向けられてしまう。この効果はどこから来ているのか？ この人物は誰に似ている？ これに似た状況設定をどこで見たのだったろう？ ここはたしかダンテの〔……〕引用じゃなかったかな？ もしこんな質問ができるようになれば、こんなレンズを通して文学テキストを見る方法が身につけば、あなたの読みと理解はがらりと変わる。読書はさらに実り多く楽しいものになるはずだ。

記憶。シンボル。パターン。これが何にもましてプロの読者と一般大衆を分ける三つのアイテムだ。英文学教授はみんな記憶に呪われている。新しい作品を読むとき、私はいつも頭の中で回転式のメモ帖を繰り、類似点や予測される結末を探してしまう。この顔はどこで見たのだったかな、このテーマは知っているんじゃないか？ こんな能力を行使したくないと思うことは多いが、やらずにはいられないのだ。〔……〕

大学教授はまた、象徴性に焦点を当てて読み、考える。そうでないことが立証されるまでは、あらゆるものが何かの象徴として機能するのだ。私たちはつねに問いかける。これは隠喩だろうか？ それはアナロジーなのか？ あつちは何を示しているのだろうか？ 文学と批評のクラスで学部から大学院へと進んでいける学生は、あるがままを示しながら同時にべつの何かを暗示するような表現を解釈する素質をそなえている。〔……〕

これに関連したプロの読書に見られるもうひとつの現象は、パターン認識だ。ほとんどの文学研究者は、表面にあらわれたディテールを読み込みながら、ディテールが示すパターンを見ている。象徴性の想像力と同じように、それはストーリーと自分のあいだに距離を置けるということであり、プロット、ドラマ、登場人物の情動的レベルを超えて先を見る力があるということだ。そういう人たちは、人生と書物に似かよったパターンがあることを経験から知っている。この技は英文学教授だけのものではない。コンピューター診断の時代以前に車の修理にあたった腕のいい自動車工は、エンジントラブルの原因をパターン認識で突きとめていた。これこれの異常が出ていたら、どこそこをチェックすべし、というように。文学にはパターンがひしめいている。あなたが読書の最中にも、作品から一歩さがってパターンを探してみることができれば、読書経験からはるかに多くを得られるだろう。〔……〕

【 この本の目次 】

プロローグ	いったいどうやったんだ？	14	空想は空を飛ぶ
1	旅はみな探究の冒険である(そうでないときを除いて)	15	すべてセックス
2	あなたと食事ができて嬉しいです——聖餐式の行為	16	セックスシーンだけは例外
3	あなたを食事にできて嬉しいです——吸血行為	17	浮かび上がったら洗礼
4	たしかどこかでお会いしたような	18	地理は重要だ……
5	疑わしきはシェイクスピアと思え……	19	……季節も
6	……さもなければ聖書だ		中休み ストーリーはひとつ
7	ヘンゼルディーとグレーテルダム	20	偉大さのしるし
8	ギリシア語みたいにちんぷんかんぷん	21	目が見えないのにはわけがある
9	ただの雨や雪じゃない	22	ただの心臓病じゃない
10	お前も痛いだろうが、パパのほうがかもって痛いんだよ——暴力について	23	ただの病気じゃないことも
11	それって象徴ですか？	24	目で読むな
12	それは政治が決めること——文学の中の政治	25	まじで？ アイロニーについて
13	そう、彼女もキリストのイメージなんだ	26	テストケース
			結びの句